

オホーツク海貝毒プランクトン速報

(R8(2026)年6月上旬)

R8(2026)年6月9日

中央水産試験場資源管理部

(担当: 海洋環境G 品田・嶋田)

・6月2日～4日にかけてオホーツク海の24地点を調査したところ、15地点で貝毒の原因となる麻痺性貝毒プランクトン(Atsc)が分布していました。そのうち4地点では、貝が毒を持つ目安となる基準値(1リットルあたり100細胞)を超えています(図1)。なお、6月の観測において細胞数が100細胞を超えたのは、2023年以来3年ぶりのことです。

・現在は「宗谷暖流(そうやだんりゅう)」という海流の勢いによってプランクトンが沖合へ押し戻されていますが、今後この海流の勢いが弱まると、沿岸のホタテガイ漁場にプランクトンが流れ込む恐れがあります。その場合、ホタテの毒性値が上昇する可能性があるため注意が必要です(図2)。

・次回の広域調査は、7月下旬に実施される予定です。

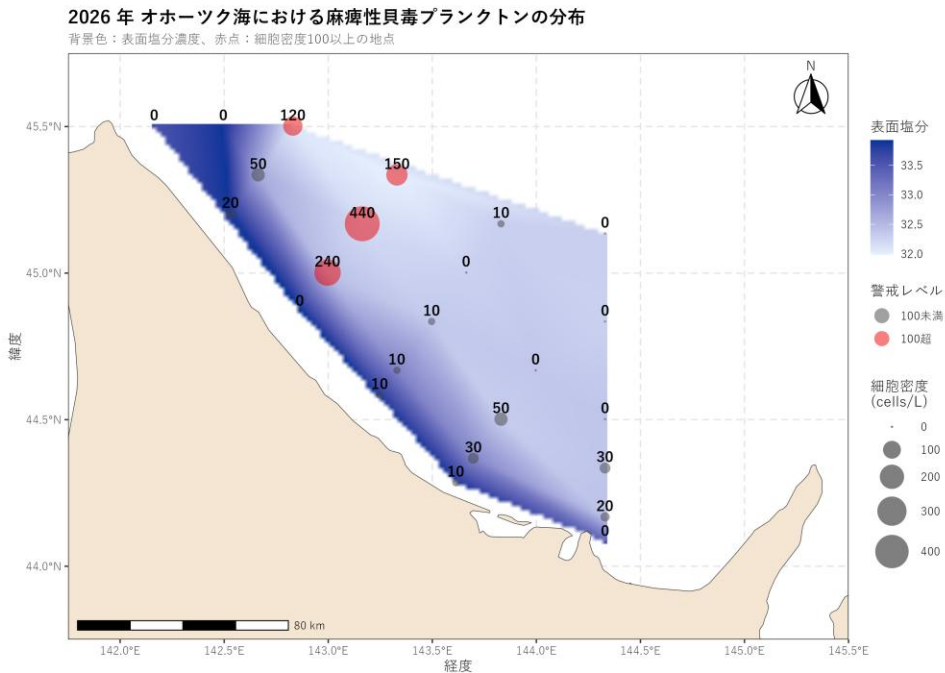


図1 2026年オホーツク海における麻痺性貝毒プランクトンの分布

稚内水試所属試験調査船北洋丸による調査結果 *本調査は水産資源調査・評価推進委託事業により実施しました。

稚内と網走の水位差 (3か月間)

稚内(WN) vs 網走(AS) - 観測基準面補正済み

● 実測水位差 ● 天文水位差 (予測)

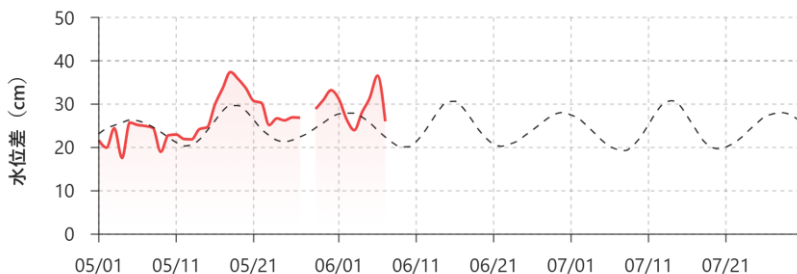


図2 R8(2026)年の稚内と網走の水位差(宗谷暖流*の勢力)

*宗谷暖流は日本海とオホーツク海の水位の落差が大きいほど強く流れることが分かっており、この落差は、稚内と網走の水位差で代表できることが分かっています。